木と共に生きて

細田安治

■■4■■

親戚頼り疎開

私が千石町にお世話になったのは1940年（昭和15年）、小学校2年の時と記憶している。平野町から引っ越して来て通学区は明治国民学校だった。

37年（同12年）7月7日、日中戦争が勃発し、4年後の41年（同16年）12月8日には太平洋戦争が始まった。39年（同14年）から45年（同20年）の終戦までの6年間は全て戦時体制下であった。

このため、私は小学校5年から祖父母の故郷である静岡県浜松在の気賀に縁故疎開し、1年間、気賀の小学校に通った。

気賀には、親戚が2軒ある。1つは、祖母かつの生家であり、厳父細田三郎といとこに当たる細田豊太郎氏だ。沖野屋の屋号で、気賀清水橋のたもとにあり、奥山半僧坊へ抜ける道と引佐へ抜ける道、都田川の支流の井伊谷川にかかる清水橋は、古くからの交通の要衝だった。

軽便鉄道

戦中には、蒸気機関車の遠州鉄道の軽便鉄道が浜松から奥山半僧坊へ通じていた。シュシュポポシュシュポッポ、ナンダサカコンナサカと懸命に走る姿は、勇ましくも哀しい風景だ。今にして思えば、当時の第2次世界大戦は圧倒的な物量の連合軍に挑む日本の竹槍部隊をイメージしたものだ。

この軽便の気賀口という停車場の前が沖野屋だった。街道と分岐点と停車場、当時の繁華街のしかも角地に位置していた。

疎開、浜松・気賀から米沢へ

祖母の実家ミカン山

昔、沖野屋は米など農作物を集荷し商っていたのだろうか、農機具を中心に雑貨など当時の万屋であった。

この家は、祖父美三郎（名倉家）がかつに婿入りし新家を興したもので細田家の始まりだ。

祖父美三郎は、当初、豊太郎氏の父である細田栄次郎氏とともに気賀にミカン山を開き、気賀のミカン農家の先鞭をつけた。このような関係では、細田の本家筋にあたる家だ。

レベル高い気賀学校

2軒目の親戚である父三郎の長姉みつの長男である長次郎氏の家でも御厄介になることになった。

祖父母は、別所帯として近所に家を1軒借りた。気賀の小学校に私は5年生、弟の孝治は2年生として編入した。

ここで、驚いたのは気賀の生徒のレベルの高さだ。国語、算数、理科など東京の学校より数段進んでおり、追いついていくのに精いっぱいだった。

気賀は徳川家康の浜松城の城下町で文武両道に秀でていたが、その子孫ならばさすがにできると思った。

近所に同級生の大沢昇、船越某の2人がいたが、親は共に教員であった。はす向かいには、細田の遠い親戚筋に当たる手塚やえさんの家があった。

鬼教師

気賀の学校でもうひとつ忘れてはならぬことは、担任の斎藤正雄先生だ。海軍帰りの極めつきのこわもてだ。間違いをした生徒の班は並べられて、お尻に木刀のお仕置をされた。本気とは思わぬが痛みは数日残るほど強烈だった。

斎藤先生は驚いたことに、戦後、野球チームの鬼監督となった。しかも、プロ野球が見たいと上京し、千石のわが家に数日宿泊し後楽園へ通ったことがある。

更に、転向が進み社会党に入党し、静岡県会議員に当選何期かの後、衆議院議員に立候補し見事当選した。鋭い論鋒で党の中堅として活躍した。人間、環境に順応すれば大抵なことはできることを学んだ。

肥え桶担ぎ

そのほか、山作業、農作業など勤労奉仕に駆り出された。なかでもはっきり覚えているのは、2人がかりで坂道を天秤棒で肥え桶担ぎして、2人の歩行が合わず後棒を担ぎ洗礼を受けた。このように厳しい気賀の生活でも、楽しい思い出は数多い。

親戚の川島長次郎さんに連れられてウナギ釣りやハゼの手掴み、長次郎さんが操る和船でサヨリやダツなどを投網で取ったことや三方ケ原にある畑からのナス、きゅうり、トマト、サツマイモ等の収穫のほか、ヤギの乳しぼり、鶏が産む卵など、自然のありがたさを教えられた。

疎開先の気賀の上空写真

◇ここでの教訓　働くことの尊さと、気が合わねば何でも上手くいかぬことを学んだ。

祖父美三郎の死

44年（同19年）12月、祖父美三郎が肺炎のため逝去した。長次郎さんは、祖父の看病のため鯉の生血がよいと、近辺を探し回って鯉を求め、喉を切ってほんの数滴しか出ない貴重な生血を盃にうけ、祖父に飲ませてくれた。

父は、「戦時中でなければ良い医者や薬を求めることができた。もっと長生きできたはずだ。残念だ」と悔しがっていた言葉を思い出す。

もう一つの出来事は、祖父が亡くなるころに遠州沖大地震が発生した。授業中であったが激しい揺れのため、校庭に退避した。弟の孝治は、川島家の庭にある柿の木にしがみつき難を逃れた。戦況不利の上に物情騒然こんな苦難が続いた。

米軍の艦砲射撃と機銃掃射

45年（同20年）3月、浜松飛行場に向けて米軍の艦砲射撃と艦載機グラマンによる爆撃と機銃掃射を受けた。特に夜間の機銃掃射は曳航弾が花火のようにきれいで、まるで映画そっくりだと思った。

気賀の上空に、爆撃を終えたグラマンが民家すれすれに急降下し、鬼のような赤ら顔でゴーグルをかけた操縦士の顔が見えるほど急降下し威圧され怖かった。

米沢へ

こんなことから、気賀も危なくなり、45年の5月、父三郎は付き添いで祖母と母静子、私、弟孝治、妹愛子、弟悌治の6人で気賀から山形県米沢市郊外口田沢大字田沢在住で、軍の米沢滞在重役の伊藤倉蔵さんを頼り米沢市へ行くことになった。

途中、不定期に列車が止まり、郡山の駅でゴザを敷き毛布をかぶって一夜を明かしたが、母の脱いだ運動靴が盗まれる騒ぎもあり、何日もかかってやっと夜間に西米沢駅に着いた。

この年は雪が多い年で、4月といっても雪が残り、おまけにこの日は吹雪であった。伊藤倉蔵さんは、馬橇で迎えに来てくれたのをはっきり覚えている。倉蔵さんの親戚で、同じ田沢在住の我妻さん所有の蚕小屋を借り受け漸く落ち着いた。

＝次回は18日付＝

（細田木材工業㈱会長）